

## 神奈川県立足柄上病院（足柄上郡松田町）

北川太郎

神奈川県立足柄上病院は昭和23年、旧日本医療団設置の医療施設を県に移管したのがはじまりで、昭和25年44床の病院として正式に発足しました。現在は、病床数296床で足柄上地区の中核病院です。最寄りの駅は小田急線新松田駅、御殿場線松田駅で各徒歩7分です。

皮膚科は昭和36年頃開設されたとのこと。現在は平成18年5月から私、北川（それまでは富山大学に在籍していました）が診療を担当しています。外来患者数は1日平均で30人程度で、比較的高齢の方が多いです。毎週月曜日は患者数が特に多く、中嶋英子先生（元皮膚科部長）に応援に来て頂いています。

入院患者は带状疱疹が多く、また



9月7日、台風9号で松田町～開成町を結ぶ十文字橋が落下



医局より富士山、御殿場線松田駅を望む



中央が筆者、その右が中嶋先生

冬には山北など酒匂川流域で恙虫病が多発します。恙虫病リケッチアのPCR、抗体価は足柄保健所で調べる態勢が整っており、無料で迅速に結果が報告されます。

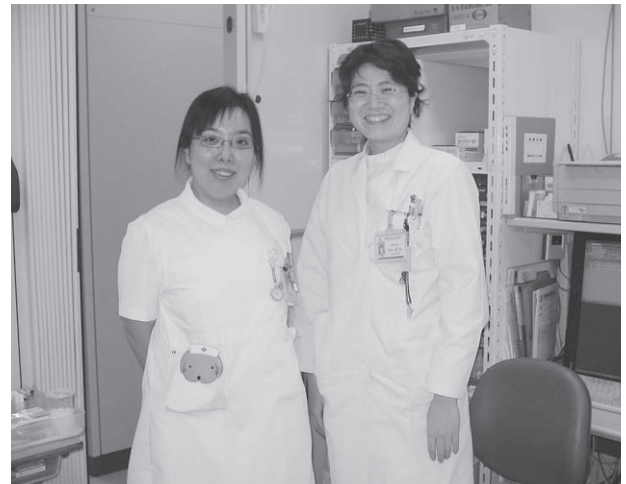
冬など、良く晴れた日には富士山がよく見えます。西に広がる箱根の山々、富士山の雄大な景色は仕事の疲れを癒してくれます。

週末の晴れた午前中には、病院裏の松田山上空をパラグライダーが飛んでいます。機会があれば一度乗ってみたいと思います。

横須賀市立うわまち病院は、平成14年7月に国立横須賀病院から横須賀市に委譲された病院です。場所はJR横須賀駅より約2km、京浜急行横須賀中央駅より約1kmの高台にあります。周辺は、住宅街および商店街となっています。高台ということもあり、自家用車、タクシー、バスで通院される方が多く見受けられます。

横須賀市立うわまち病院に生まれ変わった後、外来棟、病棟の改修がなされ、平成18年には療養病棟(50床)が新築され、現在は稼働病床350床となりました。循環器医師が8名、小児科医師が9名勤務しており、心臓カテーテル検査件数が多く、小児科が24時間診療体制をとっているのが特徴です。

皮膚科は前任の松井矢寿恵医師の後を引き継いで、医師1名、看護師(兼クラーク)1名で外来診療のみを行っています。外来患者数は40~70名、午前は処置室と診察室に患者様をご案内し、この2室を医師、看護師で行き来して慌ただしく診療をしています。午後はパッチテスト、光線イボ外来、皮膚生検外来手術、褥瘡回診、ケミカルピーリング等の完全予約制となっています。



左：皮膚科外来看護師の小野さん 右：筆者

帯状疱疹、丹毒、蜂窩織炎、カポジ水痘様発疹症など、重症例で入院が必要な患者様が受診された場合、近くの衣笠病院と横須賀共済病院に入院治療をお願いしています。いつも快く引き受けていただき、心から感謝しています。また、大きな腫瘍、悪性腫瘍は横須賀共済病院に、入院を要するアレルギー精査は横浜市立大学附属病院に紹介させていただいています。このように他院の支えがあるからこそ、うわまち病院皮膚科は成り立っているのだと感謝しています。

複数の患者様の希望もあり、自費診療でケミカルピーリングを行っています。皮膚科的にピーリングを行う是非は議論される場所ですが、アンチエイジングへの関心も高まる中で行うこととしました。ニキビの患者様から顔のくすみや小じわをとりたいたい方まで常時5~6名の患者様が通院しています。

今後もきめ細かく、患者様に満足される医療を提供し、近隣の諸先生方にもお役に立てるような皮膚科を目指して参りたいと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。



隣の小児科外来のスタッフの皆様と



横浜船員保険病院は昭和30年に結核療養所として開設され、昭和49年に総合病院として認可されました。病院は保土ヶ谷区釜台町にあり、横浜国大がすぐ傍です。周辺は古くからの住宅地で建物が密集し、高齢者が多く住んでいます。当院はそんな町の中の高台にあり、敷地は24,000㎡と広く、桜などの樹木が多いため地域住民のちょっとした憩いの場となっています。また、屋上からの眺めが素晴らしく、晴れた日にはみなとみらいや富士山が一望できます。最寄り駅は相鉄線の上星川駅ですが、病院までは急な坂道を登り徒歩15分かかります。私どもスタッフはダイエット・体力作りには最適ですが、患者さんにはつらい坂道であり、上星川駅もしくは横浜駅発のバスを利用すると病院前に停まるため便利です。

皮膚科は前任者の丸山光雄先生が、29年間という長い間御一人で診療してこられました。私は当院に赴任して2年ですが、それまで横須賀共済病院、横浜市立大学附属病院と大きな病院の勤務経験しか



病院全景

なく、赴任前は1人医長ということにやる気を感じるとともに、いささかプレッシャーもありました。赴任当初2、3ヶ月は、自分の診療スタイルを確立するのに精一杯でした。当然ですが、私にとってすべての患者さんが新患であり、また、病院のシステムにも慣れていないため診察時間が長くなり、待ちきれずに帰る患者さんもしばしば見受けられました。また、当院は船員保険会が母体であり、世界中の船から乗組員の病気に対する相談が無線メールとして届きます。その返事は何より優先されるのが決まり

となり、皮膚科には週2、3件の相談があり、外来で悪戦苦闘している時に英文メールが届くと、辞書を片手に泣きたくなることもありましたが（最近ではテンプレートを作りました）。診療時間外には外来の配置換えや手術・包交・疾患などの説明書作成、必要な機器・薬剤・材料の確認・購入準備、新患・手術患者リストや疾患別クリニカルパス作成、病棟・外来スタッフとの円滑な診療連携のためのミーティングなどに時間を費やし、深夜自宅に帰る日々が続きました。次第に診療体制が固まり、仕事がスムーズに進むようになると、患者さん



上段：久保田さん、上田さん、吉田さん、引田さん、竹澤主任  
下段：篠田先生、著者（内田）、横山さん

も増えていきました。

その実績が認められ、翌19年度からは医師が1人増員され、篠田純子医師との2人体制となりました。篠田医師は入局1年目ですが、仕事熱心で、とても明るい先生なので、スタッフとも打ち解けるのがはやく、患者さんからの印象も良いようです。私自身一緒にいてとてもやり易い先生です。また、看護師1人、受付1人増員となり、皮膚科として合計5人となりました。それでも忙しい毎日ですが、昨年と比べると随分楽になりました。7月には病院に電子カルテが導入され、はじめは慣れるのに時間を費やしましたが、使いこなせるようになった現在では患者さんの待ち時間は短縮され、データ管理が容易になり、そのデータを有効活用できるようになりました。午前中の一般診療に加え、午後は外来小手術を1日4件まで施行するようになり、中央手術も毎週水曜日に行っています。その他、学童外来、光線療法（ナローバンドUVB）を設けました。現在、外来患者は1日60～80人、入院患者は10人前後です。

当院は260床とこぢんまりした病院であり、そのため他科との連携も円滑で、透析患者、ASOや糖

尿病性足壊疽などの循環障害の患者、膠原病の患者などは内科、血管外科などと協力して診療にあたっています。特に、血管外科ではMRV（動脈でのMRA）を使い、血栓や静脈瘤の評価を行っていて特色となっています。リハビリ科も充実していて、リハビリの必要な患者さんはもとより、褥瘡患者のポジショニング、また、難治性の鶏眼・胼胝腫や皮膚潰瘍の患者に装具を作ってもらい治癒にいたった症例もありました。また、膠原病内科とは同じ病棟であり連絡を密にとって治療にあたっています。

さらに、看護師さんや事務の方々、コメディカル達も親しみやすい性格の人が多く、アットホームなところが当院の良いところだと思います。例えば通常は嫌がられる時間外オーダーを出しても病棟看護師は「いいですよ」「お疲れ様」と快く引き受けてくれます。

平成20年度には、皮膚科の外来スペースが拡大され、専用の処置室が増える予定になっています。レーザー導入も考えており、さらに診療を充実させ、院内や地域に貢献できる皮膚科を目指していきたいと思っていますので、今後とも宜しく願いいたします。



# 横浜労災病院（横浜市港北区）

金子 聡

横浜労災病院は、正式名称を「独立行政法人労働者健康福祉機構横浜労災病院」といい、実に長いものであります。（私たちは「よころう」と呼んでいますが……）。横浜市の北東部中核総合病院として、高度医療、24時間救急、地域医療の3本柱を基本方針としており、総ベッド数は650床です。その立地条件は、JR新横浜駅から徒歩10分というところでしょうか。現在、新横浜駅の大幅改修工事の真っ最中にて皆様にもご迷惑をかけておりますが、完成した暁には、横浜アリーナや日産スタジアムとならび、新横浜の新名所となりそうです。

さて、当院皮膚科も平成3年6月に開院以来、向井秀樹先生がその礎を16年にわたり築いて来られましたが、東邦大学大橋病院の教授就任に伴い、平成19年の5月に退任され、その後に筆者が部長を拝命いたしました。まだまだ未熟でありまして、特に近隣のご開業の先生方には心配をお掛けしておりますが、スタッフが皆頑張ってくれており、これまでと変わらず、あるいは最近はややover work気味といえるような、入院および外来の仕事をこなしてくれております。

その素敵なメンバーですが、現在、6名の常勤医



写真前列中央よりご存じ向井秀樹前部長、右側がお馴染み浅井皮膚科クリニック浅井俊弥院長、左側がシオン皮膚科クリニック平松正浩院長、後列左側が川崎幸クリニック皮膚科医長河野経子先生の楽しい仲間たち（向井先生談）。そして素敵な当科スタッフの紹介です！ 前列左側が饗場“とっても頼りになる”伸作副部长、後列右側より佐藤“病棟マネージャー”勘治医師、伊藤“残念、退職直後”志保医師、秋場“一番頑張ってる”美穂医師、向野“博士になりました”哲医師、沖山“ゆるさんNOVA”良子医師、尾山“専門医とろーよ”修一医師、そして前列右側が金子“筆者”聡という医師メンバーの他に、桜井雅美さんと原川宏枝さんの力強い外来看護師コンビがおります（残念ながら写っておりません）



と受託研修医（火、水、木のみ）1名の計7人で頑張っております。平成19年5月からは、ややfreshになりましたが、相変わらずチームワーク良く、しっかりとまとまっていると思います。他科で時々問題になるような「ちょっと忙しいから、急に悪化した予約外の方はみれません」などという事は殆んどなく、皆、率先して急な他科依頼や救急からの依頼などもこなしてくれています。

また、このメンバーの他に10月には救急所属の医師が週2回、創傷治癒について学びたいということで1ヶ月外来研修をしていたのですが、非常に楽しかったということで1ヶ月の延長、さらには評判が良かったようで11月からは膠原病の皮膚症状について学びたいという救急医が研修にきています。そして、当院の研修医も月に1人、あるいは2人ローテーションしてくることもあり、それに加え学生の見学が重なった日には外来が人だらけになり嬉しい熱気に包まれております。最近では外来患者数を抑えて、入院患者数を増やす傾向がありますが、それでも1日150人、多いときには180人を越えます。毎週月曜日と金曜日の午後は中央手術室でのオペが4件、水曜日は午後から回診、その後、午後7時過ぎより組織カンファレンスとエンドレスな1日となります。他の曜日の午後にはQスイッチルビーレーザー（なんと現在故障中にて修理依頼中ですが、予想外の修理費にて存続が危ぶまれております。治療途中の皆様、本当にごめんなさい）11月から本格始動のCO<sub>2</sub>レーザー、narrow band UVB（全身型ではないのですが）やUVA（こちらは全身型もあります）、そしてお馴染みの皮膚生検や往診などにスタッフみんな忙しく走りまわっております。

入院に関しては、重症アトピー性皮膚炎、带状疱疹、丹毒、蜂窩織炎はもちろん、lipomaや脂腺母斑などの小さめのオペからBCC、メラノーマなどの植皮オペおよび化学療法、水疱症、熱傷ときどき膠原病などなど、実にバラエティーに富む疾患を抱えております。ベッドの定数は20床ですが、最近では25床を越えていることも多く、逆に週末に退院がまとまってでると週明けに定数割れをきたしアセることもあり、ベッドコントロールの難しさを痛感いたします。

今の切実な悩みはというと、中々お昼が食べられないこと、食べずに頑張っても患者さんをお待たせしていることでしょうか。

そんな忙しい日常の中で、年に4回の楽しみは横浜北部皮膚科臨床懇話会です。西山茂夫北里大学名誉教授の特別講演（毎回、目からウロコがおちるのですが、翌日にはもうウロコが生えている）や近隣の先生方からの紹介患者の報告などがある病診連携の会なのですが、普段は顔を合わせられない開業の先生方とのよいコミュニケーションの場となっていると思います（皆様、ぜひ一度ご参加ください）。

昨今、医学界全体の改革が取り沙汰されておりますが、今後、当院でもDPCの導入、病院機能評価なども控えており、単なる診察のみではなく、病院全体としての体制や医療やサービスの向上などにも目を向ける必要が出てまいりました。より質の高い医療を提供する為には、医師個人だけではなく病院スタッフとの協力、さらには近隣の先生方との密な連携をとりつつ治療、診断のレベルを上げていくことが重要であると考えます。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。



# 恩賜財団済生会横浜市南部病院 (横浜市港南区)

木花 光

当院はナンブ病院とか、単にナンブとか一般に呼ばれておりますが、単にナンブと呼ばれると私はナンブの鉄瓶かと思ったり、牛追い唄でも外来に流さないかなと思ったりしています。当院の正式名は、上記のように非常に長いものです。名前は長いが効き目は早い？

横浜市の地域別総合病院計画の最初の病院として、昭和58年にオープンしました。市と済生会の共同で建設し、運営は済生会が行うという方式を反映して長い名前になっています。運営は済生会が行うといっても、事務局長は、市を定年になったお役人が代々天入り

してきており、2～3年すると交替します。お役人はこうやって自分たちのテリトリーを広げるのだなと、社会の仕組みの勉強になります。

では、なぜ市営にしなかったのかと考えると、市営では効率の悪さと人件費の高さで例によって膨大な赤字になるからでしょう。当院は皆のがんばりで黒字のことが多いのですが、従業員代表として臨んだボーナス交渉では、当院は公務員に準じており、公務員のボーナスが下がっている御時勢なので、下げないといけなと言われてきました。では、公務員に準じて第1、3土曜の開院を止めてはと提案したのですが、そういう時はここは公務員ではないのでと

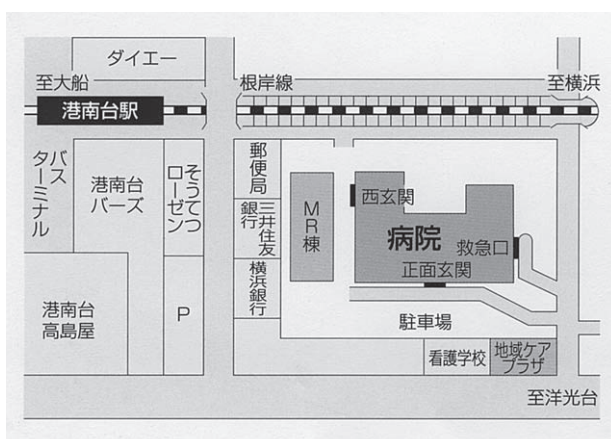


左より筆者、濱野医師、安岡医師

なります。第1、3土曜に開院しているといっても、新患のみを受け付けており、2度目からは再診になるとは思ってなかった患者さんが失望することも多いのです。土曜しか通院できないという患者さんの御紹介はご遠慮ください。

当院は名前通り横浜市の南部にあり、JR京浜東北・根岸線で横浜駅より24分（これでもまだ市内です）、大船駅からは7分の港南台駅が最寄り駅です（図）。駅から歩いてわずか2分で、線路のすぐ横のタイル貼りの威風堂々とした8階建ての建物です。中味はいざ知らず、この外観だけで患者さんが集まってきているようなものです。高島屋、ショッピングセンターのパーズ、ダイエーもすぐそばで、待ち時間に買い物に行く患者さんも多いのか、あるいは買い物のついでに病院に来ているのか、以前は高島屋の定休日には外来が少ないと言われていました。このごろはデパートもほとんど休まないのです、そうした傾向はなくなりましたが。

24年前の開院直後には、パートで来ていましたが、1階はカーペットが敷きつめられ、ホテルのような雰囲気のある照明で驚きました。間接照明と、暖かみのある電球を多用したことで、当院は済生会の病



院の中で1床当たりの電気代が最も高いとのことでした。ただし、患者さんの急速な高齢化により、ロビーが暗いとの苦情が多くなり、2～3年前に直接照らす蛍光灯を増設せざるを得なくなりました。また電気代が増えて、給料が減らされそう。確かに私も学会でホテルに泊まると、新聞が読みにくくなりました。

当科の初代部長は栗原誠一現神奈川県皮膚科医会長で、私は3代目として平成6年に赴任しました。下見に来た帰りに高島屋に寄り、ファッションのバンド・ミを並ばずに買えることを知り、当院に決めました(?)。高島屋の横浜店では、並んでも買えないことがあったので。

当時は常勤医師は2人で、毎日午前中に慶応大学より若い医師に日替わりでパートに来てもらっていました。したがって、その頃大学に入局したほとんどの医師が当科に来ていました。彼らの中に感冒を「感昌」と書く医師が出現し始め、そう書く医師は診断能力が低いことに気づきました。これが木花の第2法則(?)です。恐ろしいことに、今ではこの「感昌」が若い医師の3分の1に蔓延しています。

平成13年に5人のパート医師の首を切るのを条

件に、常勤医師を1人増やしてもらいました。しかし、今まで私以外は専門医の資格がまだない医師ばかりで、他院より紹介の新患は、私が再来担当の曜日でもできるだけ私が診るようにしています。

また、当院は地域医療支援病院というのになっており、紹介患者の率が高くないといけなく、ほとんどの科が紹介患者のみを受け付けています。しかし、公立ではないので収入の確保も最重要で、内科などは紹介制にはされていません。当科も大学医局より研修中の若い先生が来ているため、紹介制にはしたくないと病院当局に言ってあります。大学病院でとびひなどを全く見ていないので、こういう研修病院でも見る機会がないと、診断ができなくなるからです。各科のありふれた病気の診断治療ができるようになるように、現在の研修医制度が始まったと理解していますが、研修医を受け入れている大きな病院が紹介制だったり、紹介なしの患者からは高額の特典医療費をとるのは、制度の矛盾ではないでしょうか。

病院に対する保険制度の冷たい改悪も相次ぎ、病院はなんとか存続し、私がかろうじて立ち去らずに勤務医を続けているこの頃です。

